

地域学講義

柳原邦光*

Lecture on Regional Sciences

YANAGIHARA Kunimitsu*

キーワード：地域学，グローバル化，個人化，わたし，ローカル，実践，移動，自然，いのち，死

Key Words: Regional Sciences, globalization, individualization, self, local, practice, immigration, nature, life, death,

本稿は、2017年4月19日に鳥取大学地域学部3年生の必修科目である地域学総説で行った講義の原稿である。講義では、地域学部の教員による『地域学入門—〈つながり〉をとりもどす—』（ミネルヴァ書房、2011年3月）で提示した「地域学」を簡潔に紹介するとともに、出版以後、筆者が感じ取ったことを加えて、「地域学」を内容的に補った。ただし、追加部分はあくまで筆者個人の考えであるため、「わたしの地域学」と題して講義した。「地域学」を学ぶ学生たちの便宜を考えて、講義原稿ではあるが公表することにした。なお、本稿の末尾に、学生の質問への回答である『「わたしの地域学」質問と回答』（地域学総説で学生に配布）を付した。

I. はじめに

地域文化学科の柳原邦光です。どうぞよろしくお願いいたします。わたしは、2年前、1年生の学部必修科目「地域学入門」でみなさんに「なぜ、今、地域なのか」について講義しました。同じことは話せませんので、今日は、「わたしの地域学」と題してお話します。

実は、2年前、「地域学総説」でも講義をしました。あのか「これで最後だ」と思っていました。地域学部創設以来ずっと「入門」と「総説」に関わってきましたので、もうバトンタッチしようと思ったのです。しかし、状況が変わりました。仲野誠先生が亡くなられたのです。仲野さんとは、地域学部の前身である「教育地域科学部」時代から「地域学」に関わってきました。悪戦苦闘しただけに、「地域学」の重要性と難しさをよくご存じでした。わたしが「地域学の体系化」とか「理論化」といったとき、「それは違うでしょう。地域学は理論化には馴染まないのではないですか」と指摘されました。なるほどと思い、「地域学に形を与える」とか「地域学の輪郭をはっきりさせる」と表現を変えました。同じ様に思われるかもしれませんが、これは本質的な問題です。「地域学」では、「一人ひとり」が大事だからです。

わたしは「仲野さんがいるから心配ない」と安心していました。わたしたちの20年近い格闘の歴史を伝えていただけるものと確信していたからです。ところが、ご病気で急逝されてしまいました。こんなに悲しく残念なことはありません。ひどく気落ちしましたが、なんとか仲野さんの役割を果たさなければなりません。覚悟を決めて、もう一度、「地域学」（以下、地域学と表記）に取り組むことにしました。

*鳥取大学地域学部地域学科

それで今年度の授業プランを作成するときに、わたしも参加させていただいて、「地域学を創る」ために奮闘されてきた先生方に再度登板をお願いして、自ら語ってもらうことにしました。第1部でお話しされる方がそうです。第1部を通して地域学について理解を深めていただければと思います。

第2部では、学外の実践者が話されます。「実践の知」に触れてもらいたいからですが、お招きしたのは他にも理由があります。実践者の経験と知に学び、吸収して、地域学に組み込むためです。地域学を絶えず更新して、豊かに、明確にしていくのです。

また、みなさんには毎回コメントを書いていただきます。次回の授業に活かすためですが、もう一つ狙いがあります。みなさんのコメントから教員が学ぶためです。若くて柔軟な知性が地域学をどう受けとめたのか、実践者のお話をどのように感じたのか。それを理解してわたしたちの地域学を修正し、豊かにしていくのです。ですから、率直に書いてほしいのです。それで教員がショックを受けることがあっても構いません。そんなことは、たいしたことではありません。

授業が終わった後、教員は集まって反省会をします。コメントを読んで、みなさんがどう受け止めたのか、共有するのです。以前は、このような作業を繰り返して、その年の成果を、「地域学総説の挑戦」と題して、地域学部の論集に発表しました。こうした努力の積み重ねが、2011年に出版した『地域学入門—〈つながり〉をとりもどす—』です。つまり、学生も「地域学を創る」プロセスに参加してきたのです。「地域学を創る」のは、決して教員だけの仕事ではなくて、実践者と学生を含めた共同作業なのです。

ところで、2011年は東日本大震災が起きた年です。「総説」が始まる1か月ほど前でした。あの年、教員の多くは総説でうまく話せませんでした。みんな震災に心を大きく揺さぶられていました。『地域学入門』を出版できたことは、本来なら大きな喜びだったはずですが、ところが、大震災が起きて、『地域学入門』には重要な何かが欠けている、と感じてしまいました。それが何かつかめないうまま講義が始まったのです¹。

あれから6年がたちました。わたしたちの地域学はどうなったのでしょうか。『地域学入門』は震災前に書きました。震災後の経験と知の蓄積を踏まえて、「入門」の2文字の取れた、新たな『地域学』を出版すべきときがきたのではないのでしょうか。

前置きはこれくらいにして、今日は2点お話しします。1つは『地域学入門』に書いたことです²。2つ目は東日本大震災以降に気づいたことです³。

Ⅱ. 「なぜ、今、地域なのか」

最初に、『地域学入門』から「なぜ、今、地域なのか」についてお話しします。学部創設時に「地域」と「地域学」を次のように説明しています。

¹ 『地域学入門』の評価については、栗原彬「地域におけるボランティアな生き方—地域学への期待」、鳥取大学地域学研究会第2回大会（2011年度）講演・シンポジウム「地域学への期待と課題」（『地域学論集』第8巻第3号、2012年）を参照。なお、2012年度の「地域学総説」では、「〈自然〉と地域学」をテーマに掲げて、「自然と人との関係にどう向き合うのか」という問題に取り組んだ。このとき、新妻弘明さん（「地域とエネルギーから現代文明を問い直す—震災を体験して—」）と内山節さん（「自然について考える—文明の災禍」ということ—）に講演をお願いした。柳原邦光、2015、「地域学を創る3—地域学とボランティア学—」『地域学論集』第12巻第1号、第1章「2012年度地域学総説の挑戦」を参照。

² 柳原邦光、2013、「地域学を創る」、佐賀大学地域学歴史文化研究センター・地域学創出プロジェクト、『第4回地域学シンポジウム報告書 平成24年度地域学創出プロジェクト報告書（地域学）への提言』、61 - 69。

³ 柳原邦光、2015、「いのちをいただき、いのちを生かす」、『日本ボランティア学会2014年度学会誌』、6 - 11。

人々が生活している空間の広がりとそのでの社会関係、それが「地域」です。この世界は多様な規模と内容からなる様々な「地域」が寄り集まってできています。地域を考えることは、人類が解決を迫られている多くの課題を考えることに他なりません。既存の学問体系を「地域」の視点から再構成し、地域に存在する様々な公共課題の解決を目指す、これが「地域学」です⁴。

つまり、地域学は、地域に存在する人々の関係のあり方を見つめ、地域で生じる様々な問題、住民みんなに関わる問題を発見して、その解決を目指す、ということです。諸学を再構成して創られる地域学が「実践の学」であることを宣言して、学部の存在根拠としたわけです。

素晴らしい宣言ですが、実現するのは容易ではありません。「実践の学」としての地域学を新たに創らなければならないからです。途方にくれてしまいましたが、「なぜ、いま、地域なのか、地域学なのか」という素朴な問いから始めることにしました。「地域学を創る」場になったのは、「地域学総説」です。総説では、「学生が地域学を深く理解し自分の言葉で語れるようになること」を目標の1つとして設定しました。それを実現するには、まずは教員が「地域学の輪郭」をはっきりさせなければなりません。

それで10名くらいの教員が授業プランの作成と実施から、地域学の骨格を創る作業まで、毎週、長い時間をかけて議論しました。その努力の結晶が『地域学入門』です。教員11名の共同執筆ですが、実践者の方々にもコラムの執筆をお願いしました。実践者のご協力がなければ、『地域学入門』は生まれませんでした。「学術的な知」だけで地域学ができるわけがないのです。

1. 「地域」という言葉のあいまいさ

それでは、「なぜ、今、地域なのか」、考えてみます。わたしたちは「地域」という言葉を日常的に使いますが、「地域」と聞いて何を思い浮かべるでしょうか。ご近所や集落でしょうか。町とか市でしょうか。生活の場とか、生活圏でしょうか。あるいは、ヨーロッパや東アジアかもしれません。「地域」といっても、これほど曖昧なのです。しかも、かつては日常生活では使わなかったように思いますが、どうして今ようになったのでしょうか。

「新しい言葉が現れて根づいたとき、それは時代の何かを映し出している」、「社会は既存の言葉では言い表せない何かを求めている」と理解すれば、「地域」もその1つではないでしょうか。この意味で、「なぜ、今、地域なのか」という問いは、とても大きな問題に関わっているといえるのではないのでしょうか。

2. 近代的世界の問題点

わたしは、この問題の背景には、非常に大きな問題とそれを克服しようとする動きがある、と考えています。

たとえば、グローバル化の弊害です。市場経済化がグローバルに進展し、経済的な合理性と効率性、利益ばかりが徹底的に追求されたことで、雇用形態や社会保障、年金制度など、生活を守るための仕組みが維持困難になりました。最も重要な、わたしたちの暮らしが不安定になり、生きにくくなっているのです。

「個人化」の行き過ぎという問題もあります。近代は「個人の自由」を最大の価値として、人間を

⁴ http://www.rs.tottori-u.ac.jp/about-gakubu/chiikigaku_policy/index.html

集团的、社会的制約から解放し、自由を実現することを目指してきました。ある種の自由が実現したかもしれませんが、その一方で、わたしたちは、暮らしを支えてきた様々なつながりを失って孤立し、社会的なリスクに直接さらされるようになりました。

このような近代社会の抱える諸問題について、内山節さんのお考えを紹介しましょう。内山さんには、地域学総説で2度お話をさせていただきました。内山さんが指摘された近代的世界の問題点を要約すると次のようになります⁵。

近代的世界は「人間の本質は個人にある」とし、「すべてが個人に始まり個人に終わる、裸の個人の世界」である。それは資本主義的な市場経済・市民社会・国民国家という3つのシステムからなる普遍的世界でもある。「ローカルであること」を解体しながら普遍的世界をつくりだし、人々をのみ込んできた。近代の個人という理念もまた、具体的な諸関係の中で生きる人間の世界を壊し、人間を普遍的な個に変えて、取替え可能な個人にしてしまった。自由・平等・友愛の理念はあまりに人間中心主義的である。根底には、自然さえ支配できると考えるほど人間の知性を絶対視する人間観があり、人間が長い時間のなかで自然との間に築いてきた豊かな関係を見えなくしてしまった。

人々は、「ローカルな世界」で日々の暮らしを通して思想・価値観・振舞い方・考え方や感じ方を身につけてきたが、今ではそのことも、それらを共有していることも実感できなくなって、自分の居心地のよさにしか関心を示さなくなった。普遍性と抽象的な個人とをよしとする近代の理念は、自然や過去などとの様々な関係から人々を切り離し、人々の視野を狭め、複雑な諸関係のなかで展開される生活の様々な側面と、それが人の生にとってもつ意味とを見えなくしてしまった。つながりを失って、人々は「漂流する個人」になってしまった。

わたしは内山さんの見解に説得力を感じています。もちろん、不安の源は複雑で、単一の原因に帰すことはできないでしょう。少子高齢化、過疎化による地域の崩壊のように、もっと具体的な原因や解決を急ぐ課題を指摘することもできますが、根源的には、西欧近代に始まるわたしたちの時代、わたしたちの社会が行き詰まりを迎えているといえるのではないのでしょうか。社会の深部で地殻変動が起きているように思います。「個人」、「自由」、「平等」、「合理性」、「市民」、「国民国家」、「民主主義」、「普遍性」などはすべて近代社会を支える土台ともいべき理念で、わたしたちの認識の枠組みを形づくってきましたが、もはやかつての輝きはなく、多くが批判にさらされています⁶。内山さんが指摘されているように、生のあり方、自然と人間との関係、人と人との結びつき、人と国家との関係が、今、根本から問い直されているのではないのでしょうか。

3. いま何が求められているのか

この観点から社会が直面している根本的な問題とは何かを考えてみましょう。いろいろな文献を読んでいますと、共通する問題意識があるようです。たとえば、「切断」「回復」「とりもどす」という意味の言葉が目につきます。わたしたちは様々な関係やつながりから切り離されてしまった。わたしたちの生活には重要な何かが足りないという危機感があって、それが失ったものの「回復」や「とりもどす」という言葉となって現れているようです。

近代が前提としてきたのは、「個人」という人間の捉え方です。「個人」は生身の人間ではありません

⁵ 内山節, [2005] 2008, 『「里」という思想』新潮社, 100-102 参照。

⁶ たとえば、「人権」や「民主主義」など、ヨーロッパ発の普遍主義を構成する諸概念は、近代世界システムとともに不平等の構造を拡大・深化させてきたと指摘されている。詳しくは、イマニュエル・ウォーラステイン, 2008. 『ヨーロッパの普遍主義—近代世界システムにおける構造的暴力と権力の修辞学』明石書店を参照。

せん。様々な関係を削ぎ落とした同質的な存在です。日常の具体的な諸関係から距離をとって考えようとする人間です。主体的に判断し行動する人間、自分の行為の責任を取ることのできる人間、すなわち「市民」ということです。近代社会は「人間の尊厳」や「自由と平等」という理想を示して、ある意味で豊かな生を描き出しました。わたしたちは確かにその恩恵に与っています。

しかし、負の側面もあるように思います。わたしたちは、自分の身体や足元の暮らしの場から目を逸らして、遠くを見るようになりました。目指すべきもの、「良きもの」は遠いところにある、と思うようになりました。抽象的に考えるようにもなりました。しかし、そうすることで、自分を取り巻く世界を認識できるようになったのでしょうか。むしろ、「大きなものに翻弄されている、自分ではどうにもならない」と感じる人が多いのではないのでしょうか。すべてが他人事にしか感じられないつまらなさ、虚しさにとらわれ、あるいは何かに怯えて、自分のことしか考えられなくなっているのではないのでしょうか。

それだけではありません。物質生活が大変化し、様々な制度やシステムに支えられた生活をするようになって、自分の身体をあまり使わなくても、人と関わらなくても、生きていくことができるようになりました。わたしたちは自然をはじめとして、様々な関係やつながりに支えられているにもかかわらず、それを感じることも、それらの必要性を感じることも、難しくなっています。

「回復」とか「とりもどす」という言葉は、問題を指摘するときに出てきます。ということは、そう判断する前提として共通する願望があるはずです。それは何なのでしょう。身近なところにも目を向けて、生のあり方を見つめ直そう。どのような関係とつながりのなかで生きているのか、それを見つめて、自分の「世界」をはっきりさせ、生きていると実感できる場にしたい。そういう無意識の願望があるのではないのでしょうか。

こうしたことを考慮しますと、今、求められているのは、徹底して個人として生きることでも、巨大なシステムに身をゆだねて生きることでもないと思われます。もっと身近なところで支えてくれるものもまた必要なのです。というのは、わたしたちはみな、なんらかの具体的な「つながり」、「支え、支えられる関係」を必要とし、そのための「場」なくしては生きられない、と思われるからです。

わたしたちは、互いに支え合う関係を築いて、ここが自分の居場所だと思って生きたい、そう実感できる場を求めているのではないのでしょうか。さらにいえば、自分を超越する大きな何かとつながっているという実感がわたしたちには必要ではないのでしょうか。「地域」という発想の原点にあるのは、このような願望ではないのでしょうか。地域学はこの根源的な問いに応えなければなりません。

Ⅲ. 地域学を創る

1. わたしたちの生と地域

それでは、わたしたちの生にとって地域はどのような意味をもっているのでしょうか。ここでも素朴に考えてみます。誰もが「安心して幸福に生きていきたい」と思っているはず。それには、何らかの条件があるように思います。物質的な条件だけでなく、人と人との結びつきなども含まれるでしょう。わたしたちが地域というとき、このような条件が合わさって、何らかの意味のあるまとまりをもっている空間や関係を思い描いているのではないのでしょうか。

このような「地域」は、客観的に見れば、自然環境という土台の上で歴史的に形成されてきたはずです。ですから、「安心して幸福に生きていきたい」という思いは同じでも、具体的に想起されることは、地域の風土によって違うはずです。

視線を自分自身に向けてみれば、自分のなかに地域性があることがわかります。たとえば、言葉遣いや振る舞い方、食事の好み、ものの考え方や感じ方などです。その多くは育っていくなかでいつの間にか身につけたものです。自分で選び取ったものではありません。それだけに人に指摘されてはじめて気づくことが多いのですが、このような感覚や無意識的な判断の基準を生み出す場が存在していて、そこから、わたしたちは個性の重要な部分を獲得していると思われます。

さらにいえば、地域は生のあり方や生きているという実感を支える、重要な何かに関わっているようです。この意味で、地域は「生の充実」や「わたしの幸福」にとって欠かすことのできない「拠りどころ」ではないでしょうか。地域学はこのような地域性を尊重するところからスタートします⁷。

とはいえ、人と地域性との関係はとても複雑で微妙です。わたしたちは「移動する存在」であり、移動とともに新たな地域性を受け入れ、自分のなかに積み重ねていくからです。濃淡はともかく、複数の地域性とともに、ときに葛藤しながら生きている、と考えた方がいいでしょう。移動する人々の存在はまた、当たり前だと思われていた何かを揺さぶり、地域に微妙な変化をもたらします。こうした人・モノ・情報の移動、それにともなう文化的なものの移動によって、地域は常に変化にさらされています。地域は閉じた、固定したものではなく、ある程度、変化に開かれたものと見るべきでしょう。これが「移動の視点」です。

もう1つ重要なことがあります。人は地域を「拠りどころ」だと感じていないかもしれません。人を束縛するものとして忌避することさえあります。当然のことながら、地域には振舞い方、考え方や感じ方などを「制約」するところがあるからです。たとえば、ある学生はコメントで「両親は地域なんていらなないといっています」と述べていました。ここには地域への強烈な嫌悪感・拒否感が見られます。わたしはこの言葉の意味が痛いほどよくわかります。地域がわたしたちの生にとって不可欠なものであるとすれば、このような地域の多様な側面、地域に対する複雑な感情をしっかりと受けとめて、できるだけ「誰もが生きやすい状態」にしていかなければなりません。

地域課題として意識され易いのは、生活の基盤が揺さぶられているときです。生活はローカルな場で営まれています、国家的なものや全国的なもの、グローバルなものと分かちがたく結びついています。地域学は、経済構造のような、生活を枠づけている枠組みや構造を視野に入れて、生活との関わりを検討しなければなりません。

その一方で、「生きにくさ」、「息苦しさ」、「物足りなさ」といった「目に見えない問題」もあります。「暮らしを楽しみたい」、「こうありたい」という願望もあります。人の生き方や文化に関わることも、地域学の重要な検討対象なのです。

それでは何が地域性を作り出しているのでしょうか。地域のもつ構造と地域性を捉えようとするのが「客観的・構造的視点」です。地域性の基盤は、自然環境や風土です。その上でわたしたちの生活が営まれているからです。

この点を考えてみますと、人間は自然に「働きかけられる」存在であって、生活のあり方も考え方も感じ方も、要するに、文化の総体が自然によって枠づけられています。その一方で、人間は自然に働きかけ、暮らしをつくってきました。「風土」とはそういうものです。地域は人間の活動が刻印され蓄積された歴史的所産であり、自然環境と人間の営みの相互作用から生まれ、変化していくのです。

⁷ 柳原邦光・光多長温・吉村伸夫・一盛真・家中茂・藤井正, 2008, 『『地域学』を創る一鳥取大学地域学部の試みー』『地域学論集』第4巻第3号参照。吉村伸夫さんの文化を中心とした「地域」の定義と「生の充実」の意味については、柳原邦光, 2008, 『『地域学総説』の挑戦3』, 『地域学論集』第5巻第2号及び、吉村伸夫, 2011, 「文化現象としての地域一生の充実を求めて」, 『地域学入門』を参照。

ここで確認し強調しておきたいことは、決して「人間の意思がすべて」ではないということです。そして、地域性を捉えようとするとき、まずは自然と人間の営みとの複雑な関係のありようを解明しなければならないということです。

次に、地域とはどのような空間なのでしょう。地域は、自然環境や社会環境、人と人との結びつきを含めて、何らかのまとまりをもった、曖昧な空間のようです。行政区分のようにはっきりと線引きできる空間でも、あらかじめ大きさを特定できるものでも、ありません。何か検討しなければならない問題にぶつかったときや、こうありたいと思ったとき、問題や願望に応じて考慮の対象となる空間的な広がりが決まるのです。

地域はまた、大小様々な空間との関係性や重層性のなかにあります。地域のなかにさらに地域があるというイメージです⁸。さらにいえば、地域を考えると、国家の諸制度や経済システムなどとの関係を考慮しなければなりません。暮らしに深く関わっているからです。わたしたちの生と地域はこのような目に見えない複雑な構造と関係性のなかにあります。

2. 地域に向きあう作法としての地域学

それでは、地域を考えようとするとき、どこに足場を置けばいいのでしょうか。まなざしをどこに向けるべきでしょうか。実践者に講演をしていただいたことはすでに話しました。実践者の語りは学生たちの心を強く捉えました。どうしてでしょうか。実践者は生活から遊離したところで問いを立て、考え、実践してこられたわけではありません。自分の欲求や願望、自分自身の問いから切り離された営みではないのです。だからこそ「確かなもの」を感じさせるのではないのでしょうか。実践者から学んだのは、自分の足元、生活の現場から考えることです。これは「生活からの視点」ですが、なぜこの視点が重要なのでしょうか。

『地域学入門』では、家中茂先生の執筆された第4章「生活のなかから生まれる学問—地域学への潮流」がこの問題に取り組んでいます。わたしは次のように理解しました。

問題は「近代の知」のあり方である。西欧から導入された学問は社会で起こる出来事を自分自身の生き方や問題から切り離して考えることを前提にしている。問題と無関係な立場に立って考えることで、「客観性」を確保しようとしたのである。わたしたちはこのような知を学校や大学で学ぶことで、真理や優れたものは自分の生活から離れた別のところにあるという感覚を身につけた。生活から切り離して問いを立て、考えるようになった。この自分自身の問いから切り離された知のあり方は、人の切実な問いに答えるものではなく、生きていくときの倫理や判断の基準として十分だとはいえない。というのも、生きるとは当事者として暮らしの全体性のなかで考えることだからだ。人は日々生起する諸問題に直面し、適切な解決方法を探し求める。暮らしの現場では問題の外に立って考えることはできない。問題のなかで、自分に向き合い、自分を問い直しながら、解決しなければならない。

生活で重要なのは、自分の状況を理解し、そこから問題を把握することだ。日々の具体的で複雑な状況のなかで確かな判断ができるようになることだ。それには判断の目安が必要だが、重視すべきは、自分の身体や生活から得られたものの見方である。生活の現場から立ち上がる知、自然のなかで、身体で獲得された知である。これこそが人々を結びつけ変えていく力となる。

こうした知の捉え方は学問の捉え直しを迫る。生活のなかで一人ひとりが日々体験するリアルさ、

⁸ 内山節さんは地域の積み重なった形を「多層的共同体」と表現している。詳しくは、内山節, 2015, 『増補 共同体の基礎理論』農文協, 第3章「共同体のかたち」を参照。

切実さを直視して、生活の必要と切実さに応える学問が必要だ。それが地域学である。

以上が「生活からの視点」の概要です。わたしはこの見解に説得力を感じています。どこに足場を置いて考えるべきか、なぜそうなのかを明瞭に語っています。もちろん、「学術的な知」を否定するわけではありません。生活の現場で獲得される知こそ、今まさに必要とされている、と思うのです。

次に少し角度を変えて、地域にどのように向き合えばいいのか、考えてみます。仲野誠先生の執筆された第5章「生きられる地域のリアリティー反省の学としての地域学を目指して」では、「わたし」の「いま、ここ」から地域を捉えようとします。要点をまとめると、次のようになります。

本来、人はみな「いま、ここ」で他者との関わりなくしては生きられない。必要なことは、自分がそのなかで生きている関係性やつながりに気づくことだ。あるいは、それらを回復して、生きているという実感のある状態を実現することだ。「掘りどころ」であるはずの地域を自分の手に取り戻すことだ。そのために、一見すれば私的なものにみえる「わたし」の「いま、ここ」から、自己の生き方を反省的に捉えつつ、考えてみよう。

たとえば、人の振る舞いや規範を生み出す社会的な構造と空間的な関係性がある。過去から未来へとつながる時間もある。この「構造」と「関係性」と「時間」のなかに「わたし」の「いま、ここ」を位置づけて、自分がどのような関係やつながりのなかで生きているのかを考えてみよう。そうすれば必ずと「みんなに関わること」が見えてくる。それはまた、地域に存在する様々な問題に気づいて、それを乗り越えるための知恵を生み出すことにもなる。

地域学は「自分の誇りや生きがい、歓びを自らの手に取り戻すための態度を醸成する学問」、いわば「態度や作法としての地域学」である。重要なのは、自己へと向かう内省的なまなざしである。このまなざしが「わたし」のなかに見出すのは、他者から独立した確固たる自己というよりも、他者が幾重にも織り込まれた「わたし」である。「わたし」は他者とつながっていて、他者を絶えず織り込みながら存在している。他者と関わることで、このことに気づき、ともに変化するのである。このようなまなざしと他者認識をもつことが、様々な関係性やつながりを取り戻すために必要なのである⁹。

少し説明を加えますと、自分自身を見つめてみれば、自らの意思で学び取ったものだけではなく、自然や社会で、地域のなかで、いつの間にか身につけたものがあることに気がつきます。自分をつくりあげているのは、自分独自のもの、自ら選びとったものというよりも、自然や過去、過去の人々との関係を含めて、自分自身が生きている様々な関係やつながり、すなわち「他者」だということです。人と関わることで、このことに気づき、何かを学び、吸収していくのです。

それは「みんなに関わること」を自分のものにすることでもあります。さらにいえば、「他者から

⁹ 内山節さんも、同様の指摘をしている。多様な関係をつくることは人間の本質に属し、関係をもたなくなることは人間の自己否定であり、それらの様々な関係のなかで、他者から働きかけられることによって、人間は自分の存在の意味を感じとっていると。そして他者との関係について次のように述べている。「他者から働きかけられている自己。この他者にはいろいろなものがある。自然も重要な他者だろう。自然とともに生きてきた人たちは、自然からの働きかけのなかで自分が存在していることを知っているし、この関係こそが自分を自分たらしめている重要な要素である。もちろん他の人々も重要な他者だ。私たちの多くは他の人々から働きかけられているなかで仕事をしているし、暮らしをつくりだしている。もちろん自分も他者に働きかけている。それは自然という他者に対しても同じことだろう。この働きかけられ、働きかける関係のなかで、私たちは生きているのである。文化という他者からの働きかけもある。歴史という他者からも、死者という他者からも私たちは働きかけられている。そして働きかけている。」内山節, 2011, 『文明の災禍』新潮社, 144-145。宮内あすかさんは内山さんの指摘に驚き、「自然、文化、歴史などからの働きかけというものを、私たちは日々の暮らしのなかで感じるだろうか」と自問している。宮内あすか, 2011, 「自然とつながる暮らし」, 2011 年度鳥取大学地域学部地域文化学科卒業論文。

あなたはどうか生きるのか」と問われることでもあります。こうして「いま、ここで、生きている」という感覚を取り戻し、これからを考えることができるということです。これが「〈わたしのいま、ここ〉からの視点」です¹⁰。「生活からの視点」と並んで地域学にとって核となるもっとも重要な視点だとわたしは考えています。

3. 様々な視点で地域を捉える

それでは地域を捉える視点をまとめてみます。視点とは、「誰もが生きやすい状態」を実現しようとするとき、どこに立って、何を見据えながら考えるか、ということです。これまで4つの視点を提示しました。「移動の視点」、「客観的・構造的視点」、「生活からの視点」、「〈わたしのいま、ここ〉からの視点」です。

これらの視点は2つに大別できます。1つは、観察者が地域の外に身をおいて地域性を客観的に捉えようとする「客観的・構造的視点」です。これはオーソドックスな学問的手法です。

他の3つの視点の場合は、違います。観察者は、地域のなかにあって、地域を生きる当事者の一人として問いを立て、地域を考えようとします。また、地域を生きる「わたし」の願望や「わたし」が抱える様々な問題を重視して、生活空間のような小さな空間をじっと見つめ、様々な関係やつながりを捉えようとします。そして、そこから自分の生と、ナショナルなもの、グローバルなものとの関係を考えようとするのです。これは内山さんの捉え方とよく似ています。

内山さんは「大きな世界」から「小さな世界」へ視点の移行が進んでいるといいます。最初に大きな世界を構想し、それとの関係で小さな世界を見ようとするこれまでの視点から、自分たちが暮らし、責任をもてる小さな世界を大事にして、小さな世界のネットワークとして大きな世界を見ようという視点に変わりつつある。小さな世界に足場をもって、そこから大きな世界を捉え直そうというのです¹¹。

「地域のなかから考える、地域で考える視点」はとても重要です。地域という枠組から考えると、人が消えてしまいますが、「わたし」から考えることで「一人ひとり」が見えてきます。そうして地域のもつ意味と地域の抱える諸問題とが浮かび上がってくるのです。こうして見出された問題が検討の対象となる地域の広がりやを決定し、今後のあり方を考える上で大きな役割を果たすのです。

もう1つ、長期的な時間の推移のなかで地域をみることも重要です。地域をつくりあげているもののなかには、ほとんど変化しないか、100年を超えるような、さらには数百年とか千年を超えるような長期的な時間のなかでゆっくりと変化するものがあります。人の意識にのぼることのない「深層の歴史」です。また、もう少し短い時間で変化していくものや、ごく短期間で急激に変化するものもあります¹²。地域の「現在」はこのような様々な時間の重なり合い、すなわち「多層的な時間」¹³か

¹⁰ 政治哲学の分野でも、現代を「〈私〉時代」と捉え、「市民」ではなく、「〈私〉」から始めて、「〈私〉」と「〈私たち〉」という視点からデモクラシーや社会について再考しようとする、興味深い試みがなされている。宇野重規, 2010, 『〈私〉時代のデモクラシー』岩波書店を参照。

¹¹ 内山, 『「里」という思想』100-102。歴史学研究では、二宮宏之さんの研究が参考になる。二宮さんは、「歴史を、その時代を生きた一人ひとりの人間において捉え」るために、「からだ」「ところ」から「きずな」または「しがらみ」（社会的結合）の把握へと進み、生活秩序から権力秩序を捉え直すことを主張している。二宮宏之, 1994, 「参照系としてのからだところ—歴史人類学試論」, 二宮宏之『歴史学再考—生活世界から権力秩序へ』日本エディタースクール出版部, 3-41。このほかに、二宮宏之, 1986, 「フランス絶対王政の統治構造」, 二宮宏之『全体を見る眼と歴史家たち』木鐸社, 112-171 を参照。

¹² たとえば、フェルナン・ブローデルは次のように記している。「私が出発したのは日常性であった。生活の中でわれわれはそれに操られているのに、われわれはそれを知ることすらしないもの。習慣（l'habitude）—慣習的

ら見る必要があります。それは地域の「未来」を構想するときに必要なことでもあります。

歴史について補足しますと、生活者にとって、国家や国民の歴史だけでなく、自分たちの小さな世界の歴史もまた重要です。自然との関係、過去の世界や過去の人々とのつながり、自分たちの生活のしくみ、その根底にある「精神の習慣」¹⁴を感じ取ることでできる「気づき」¹⁵としての歴史です。自らをよく知るための歴史です。わたしたちの生は「現在」を超えた大きなつながりのなかにあるのです。

地域学総説にきていただいた作家の森まゆみさんは、「歴史が降り積もっているところで暮らすことは、生を豊かにしてくれる」という言葉で、自分自身を超えた、永続的な何かとつながっているという感覚が人の生にとって欠かすことのできないものであることを見事に表現されました¹⁶。「抛りどころ」としての地域を「とりもどす」ためには、この歴史性の回復が不可欠です。これを5つめの「歴史的視点」として追加しておきます。

4. 「地域学」の目指すもの

次に、地域学が何を目指すのかを考えます。わたしたちは「安心して幸福に生きていく」ために、地域性を含めて、何がしかの条件を必要としています。この条件とはなにか、それを実現するにはどのような方法があるのか、こうしたことを考えるのが、地域学の仕事です。これを人間の関係についていいますと、わたしたちは、人と人との結びつき、支え合う関係と、そのための場を必要としています。このような「関係」と「場」に必要な諸条件とそれを実現する方法を考えるのも、地域学の役割です。つまり、地域学の独自性は、わたしたち「一人ひとり」の「生の充実」や「わたしたちの幸福」の実現、「誰もが人として生きやすい状態」の実現を、地域という空間的な枠組みに着目して、地域性と歴史性を尊重しつつ、5つ視点から、考えることにあります。

もう1つ、地域は、「わたし」が従属すべき絶対的な、不変の存在ではありません。地域は現に在るもの、「現実の地域」であると同時に、未だ実現していない、こうであってほしいと望まれるもの、「望まれる地域」でもあります。地域学はこの隔たりをしっかりと認識し、これを埋めるべく、絶えず現実の地域を見つめ、再検討します。そのために、あらゆる学問分野、さらには、生活の場から立ち上がってくる「生活の知」を含めて、あらゆる知が動員されるのです。

行動 (la routine) と言うほうがいいかもしれない—そこに現れる何千という行為は、それら自身で完遂され、それらについて誰も決定せねばならないということはなく、本当のところ、それらはわれわれのはっきりとした意識の外で起こっている。人間は腰の上まで日常性の中に浸かっているのだと私は思う。今日に至るまで受け継がれ、雑然と蓄積され、無限に繰り返されてきた無数の行為、そういうものが、われわれが生活を営むのを助け、われわれを閉じ込め、生きている間じゅう、われわれのために決定を下しているのだ。こうした行為を行なわしめる刺激、衝動、規範、様式、あるいは義務は、われわれが思っている以上に多くの場合、人類史の起源にまで遡るのである。非常に古く、しかもなお生き生きとした何世紀をも経た過去が、アマゾン川が大量の濁水を大西洋に流し込んでゆくように、現在という時間の中に流れ込んでいるのである。」(フェルナン・ブローデル, 1995, 『歴史入門』太田出版, 18-19)。このほかに、フェルナン・ブローデル, 1989, 「長期持続—歴史と社会科学—」, 『フェルナン・ブローデル [1902-1985]』新評論, 15-68 を参照。

¹³ 「多層的な時間」については、内山節さんの見解が参考になる。内山, 『「里」という思想』68-73。

¹⁴ 「精神の習慣」はアレクシス・ド・トクヴィルが『アメリカの民主主義』で用いた概念。原語は *moeurs* (「習俗」) で、「心の習慣」と訳されることもある。詳しくは、松本礼二, 1991, 『トクヴィル研究—家族・宗教とデモクラシー』東京大学出版会, 117-124 を参照。内山さんの理解については、内山『増補 共同体の基礎理論』98-103 を参照。

¹⁵ 「気づき」については、『地域学入門』の第5章、仲野誠「生きられる地域のリアリティー—反省の学としての地域学を目指して」を参照。

¹⁶ 柳原邦光, 2012, 『「地域学総説」の挑戦6』, 『地域学論集』第8巻第3号, 10頁を参照。

以上から、地域学を次のようにまとめることができるでしょう。地域の構造と地域性を客観的に把握するとともに、「一人ひとり」の思いと生活を重視して、「現実の地域」をみつめ、諸問題を探り出して、その解決を図ること、5つの視点から「望まれる地域」の実現に寄与すること、です。したがって、地域学は、「まちづくり」や「地域活性化」といった住民活動や政策テーマと密接な関係がありますが、その次元にとどまるものではありません。住民活動や政策の根源に存するものへの自覚的な問いかけを促すのです。このような意味を含めて、地域学は「実践の学」なのです。

5. 「確かなもの」を求めて

最後に大きくまとめてみます。『地域学入門』の最も重要な検討課題の1つは、「自分の立つべき位置はどこなのか、まなざしをどこに向けるべきか」ということでした。わたしたちが学んだのは、目を向けるべきはまずは自分の足元であり、そこからまなざしを広げていくことです。自分の足元、すなわち、自分自身を、自分の育ってきたところを、生活しているところを、よく見てみよう。そこを足場として、生活する当事者として、考え、行動しよう、ということです。それと同時に、生活の場を枠づけている大きな構造を捉えようとするまなざしも欠かせません¹⁷。このような複眼的なまなざしをもってはじめて「拠りどころ」としての地域を自らの手で取り戻すことが可能になるでしょう。

地域学総説でのチャレンジを通して理解したのは、足元の暮らしを大事にして、「つながり」や「関係」をみつめ、とりもどして、他の人々とともに手応えのある「確かな関係」を再構築していこう。「確かな関係の再構築」こそが、生きていくための「確かな希望」になる、ということでした。

IV. 「いのちをいただき、いのちをいかす」

振り返ってみますと、わたしたちは、地域を考えるときの「まなざし」、「基本的姿勢」や「作法」を確認しなかったのだと思います。しかしながら、『地域学入門』には何かが足りない、漠然と感じていました。それは何だったのか。この問題を、東日本大震災を通して考えます。

これから、わたしが最も衝撃を受けた、新妻弘明さんの地域学総説での講演を紹介しながら、考えてみます。講演タイトルは「地域とエネルギーから現代文明を問い直す―震災を体験して―」¹⁸でした。新妻さんは東北大学の名誉教授でエネルギーの専門家です。ご自身も仙台市で被災されています。

講演は、地震と津波に破壊され、瓦礫がえんえんと広がるなかに、人の姿がボツンと小さく映っている写真から始まりました。新妻さんはいいます。自然のとてつもない力と、それを前にしたときの人間の無力さ、小ささ。「もうわけがわからない。でも生きていかなければならない。」そういう状況に放り込まれたとき、「みんな、必死で考える、考えるというか、身体で考える、身体で思う。」そして「これまで見えなかったものがいきなり露わになった」と。

それは何だったのでしょうか。新妻さんは、現代社会を巨大システムに依存した「点滴社会」であ

¹⁷ 歴史研究者の川北稔さんは、若者の世界史への関心の低下を危惧して、歴史研究が現実に向き合う必要性を指摘し、「普通の人間の生活感覚に根差した問題」に取り組むことを提案している。たとえば、「グローバリゼーションにどう対応するかという問題を考えるために、人びとの生活の具体的なあり方と、世界的なつながりの二つをうまく組み合わせていかないと、現在の人間にとって面白い歴史にはならない」として、「世界各地の庶民生活が、世界システムの作用をつうじていかに結びつき、今日の状況をつくりだしているのか」を自らの歴史研究の基本課題だと述べている。川北稔、2010、『イギリス近代史講義』講談社、9-10。

¹⁸ 2012年度地域学総説の第2部「〈自然〉と地域学」で2012年6月20日に行われた講演。このほか、東日本大震災前に出版された新妻弘明、2011、『地産池消のエネルギー』NTT出版を参照。

り、「切り身社会」だと表現されました。

わたしたちは自分で生きてはいない。自分では何もしないで、システムによって生かされている。システムとはお金でしかつながっていない。お金がなければシステムから切り離されてしまう。そうすると、自分ではもうどうにもできない。ちょうどベッドで点滴を受けている病人のようなものだ。自分では何もしないで、点滴で供給される栄養源だけを頼りに生きている。だから、点滴が切れると死ぬしかない。それと同じように、電力・水道・ガス・通信などの諸々のシステムから切断されると、生活できなくなる。だから「点滴社会」だということです。

また、日常生活が自然とつながっていないから、自分のところだけを見て、全体を考えようとはしない。スーパーで切り身の魚を見て、それが魚だと思ってしまうようなものだ。自分の生きている世界のごく一部だけしか見ていないにもかかわらず、わかった気になっている。全体を思い描くことができない。だから「切り身社会」に生きている、ということです。

つまり、わたしたちは自分の生活に責任をもって生きていない、ということです。頭だけで考えて、それがすべてだと思っている社会、身体で考え、身体で思うことがほとんどできない社会に生きている、なぜなら「日常生活が自然とつながっていないから」です。

このような生活は科学に支えられています。しかし、新妻さんは、その科学的思考にも問題がある、といいます。というのは、科学は事実よりも理屈を重んじるからです。確かな科学的根拠、「エヴィデンス」がなければ、科学として考慮すべき「事実」としては認められません。そのため、目の前にあったとしても、科学的には事実として存在しないことになってしまうのです。

また、重視されるのは、ものごとを客観的に見ること、普遍的に考えようとすることです。どこにでも通用する「普遍的な知」が重視されて、ある地域だけで確認されるような具体的事実は軽視されてしまいます。

東北地方は、数百年おきに大地震や津波に見舞われ、大きな被害を出してきました。にもかかわらず、人の生存に関わる、最も重要な事実が伝えられ活かされていない。どうしてこのような歴史的知の断絶が起きてしまったのか。ある地域だけに限られる知を軽視して、「普遍的な知」だけを追求することで、具体から目が離れてしまい、人間の力、科学の力を過信して、「これだけ文明が進んだのだから、津波はこない」と思い込んでしまったのではないかと、ということです。

大震災を経験して新妻さんが気づいたのは、人は自然と向き合って、折り合いをつけて暮らしてきたこと、自然の強さ、すごさ、ありがたさ、恐ろしさ、優しさ、です。また、死が身近であること、死を見つめることが人生を考えることだ、ということ。そして「命を託す」ということです。

2つ例を挙げます。自然と向き合って暮らしてきた人々のすごさについて、新妻さんはこういいます。

自然というのは、ときにおっかないが、優しさもある。本当におっかないけれども、優しいところもある。あと、みんながいうのは、漁師さんなども、海に恨みはないといいます。あんなにひどい目に遭って、家族をみんな殺されて、恨みはないということです。それに対して、原発とか東電、みんな憎い、憎い、憎い、といいます、でも海には恨みがないということです。怖いということはあるが、恨みはないと。

人々は、自然を受け容れ、自然と折り合いをつけて、生きてきたのです。次も新妻さんの経験です。海辺の地域に支援物資をもっていったときのことです。

それで、支援物資を持って、避難所みたいなどころに行って、いやあ、ここのワカメはおいしくてね、うちの母ちゃんが買ってくるのがおいしいからね、と言い訳して入るわけですよ。そして、支援物資をもらっていただけますかといったら、漁師さんが、もう少し待っていてくださいというのですね。彼らはひどい目に遭っても海を見えています。もう少し待ったらワカメはすぐとれると。もう少し待っていてくださいといわれて、救われました。こんなにひどい目に遭っても、そこに海の恵みはあるぞと。それを我々は町場の人たちのためにとってやっているのだと、だから、またとってやるから待ってなさいよ、といってくれた。ありがたかったですね。

新妻さんは、被災して「弱者」になった人たちに、支援者として助けにきたという、「強者」として接することにためらいを感じておられたようです。ところが、被災された人たちは弱者ではなかったのです。「確かな何か」をもっている人たちだったのです。新妻さんは、海を信じ、海とともに生きてきた人たち、自然としっかり向き合ってきた人たちの強さ¹⁹を感じとったのです。それで「救われました」というのです。

もう1つ、「命を託す」です。新妻さんは、エピソードを1つ紹介されました。津波で家が流されて、ある家族が屋根の上に逃れていた。たまたま家が土手に流れついたので、お父さんが家族を岸に渡らせた。ところが、家が岸から離れて、お父さんが屋根の上に残されてしまった。そのとき、お父さんは満面の笑みを浮かべて「バイバイ」といったのです。お父さんは家族に「命を託した」のです。「生命体は、子孫に命を託すことが最大の目的なのです。生命というものは、そういう風にできているのです」、と新妻さんはいいます。

このように新妻さんの脳裏に真っ先に浮かんだのが、「自然」と「命」と「死」なのです。そしてそれが展開される具体の場が「地域」だといえます。

人は長い間ずっとと自然と向き合い、死と向き合って、死者とともに暮らしてきた。地域とはそういう場である。単なる物理的な空間ではない。風土とともに形成されてきた様々な関係性から成り立っているのが、地域である。ここで人々は積み重なった過去とともに生き、子孫のことを考えて暮らしてきた。長い過去と自分を超えて続いていく未来とをしっかりと見据えながら、生きてきた。だから、「地域には個人の意思以上のものがある」。

地域は「心の原点」であり、「文明の基盤」である。重要なのは「普通の地域の、普通の人々の、普通の営み」である。だから、地域を離れてものを考えることはできない。「地域で、地域から考える。」「地域を見つめ、地域を学ぶ。」復興の原点とは、「地域を生きる人々の心とは何か」ということだ。

今、「文明の分岐点」に立っている。従来通りの形を続けて破滅するのか、環境と共生する文明へと転換するのか。重要なことは、どのように舵を切るか、ということだ。それは震災の教訓をどう活かすか、ということでもある。今まさに、「大きく時代をつかみとる学問が必要だ。」

そして最後にこういわれました。

¹⁹ この点について2つのドキュメンタリー映画が参考になる。1982年以来島をあげて原発建設反対運動を続けている島民たちに密着した『祝の島』（額瀨あや監督、2011、ポレポレタイムス社）と『飯館村の母ちゃんたち 土とともに』（古居みずえ監督、2016、映画「飯館村の母ちゃん」制作委員会）である。登場する人たちの語る言葉は、シンプルで深く、そのまなざしは驚くほど長い時間を見据えていて、感動的である。なお、後者の映画については、監督の古居みずえさんの言葉も心を揺さぶる。「古居みずえさんインタビュー：『笑ってねえと、やってらんねえ』。怒りや痛みを抱えながらも、力強く生きる女性たちの姿を撮りたいと思いました」、「通販生活」公式通販サイト <https://www.cataloghouse.co.jp/yomimono/160426/>

環境共生文明というのをつくりたいといけないうったときに、どんな社会システムでも、どんなもの、製品でも、どんな文明でも、一人ひとりの心にまで落とし込まなければ、本物ではないと思います。だから、何か非常に単純な原理を持っていれば自然に環境共生になるような、そういう仕組みというものを我々専門家とか知識人みたいな人がつくっていかないといけないう。

私は、私の言葉でいうと、「いのちをいただき、いのちをいかす」、こういう気持ちというのが、これをただ一つの原理にしていろんなことを考えていけば間違いないのではないかな、と思います。(中略)何か非常に単純な原理、それをよりどころにしていくというのが、重要なのではないかと思います。

新妻さんの「いのちをいただき、いのちをいかす」は、深い言葉です。「いのち」は、人間の命だけではなく、自然とともにある「生きとし生けるもの」ということでしょう。また、人間もまた、自然の一部であり、そういうものとしていただきたいのちを生かしきろう、ということです。人間中心主義ではありません。

『地域学入門』を出版した時、何かとても重要なものが欠けていると思いましたが、それが何だったのか、よくわかりました。わたしたちが、地域学が常に見詰め続けるべきもの、立ち返るべきもの、それは「いのち」なんですね。「自然とともにあるいのち」、「自然の一部であるいのち」です。「いのちをいただき、いのちをいかす」ということです。そのためには、自然に向き合うこと、死に向き合うこと、自然と人間との関係を捉え直すこと、です。それが人間の原点だということです²⁰。

V. おわりに

最後に、「いのちをいただき、いのちをいかす」を、実践の観点から、考えてみます。取り上げるのは、NPO 法人ホーム「ホスピス宮崎」理事長である市原美穂さんの「かあさんの家」の活動です。

「かあさんの家」では、末期ガンのような、余命幾ばくもない高齢者、ほかの施設では受け入れてもらえないような人を普通の民家でお世話して、看取るという実践活動をしています。「かあさんの家」の基本理念は、人生の幕を閉じる時に、自分の生きて来た場所で、なじみの人に囲まれて過ごしたいという願いに応じて、生活者として最期まで生き切るよう支えること、何よりも本人の意思を尊重し、本人が決めたことを最善だと思ってサポートすること、家族にも、安心して寄り添って、悔いのない看取りができるような場を提供することです。市原さんはいいます。

家族の方には、暮らしの中で看取るということを自分達の中に取り戻して欲しい。病院で看取る時もモニターは見ないで、ちゃんと手を握って、声をかけて欲しい。安らかな生と死を支え、命を受け止める地域へ。死は特別なことではありません。みんな死ぬ。それは自然な経過です。

死は敗北ではなくて、人生がそこで完結する訳ですから、物語として、充実できていれば、敗北

²⁰ 筆者はこれまで様々な人々の思想や実践を地域学のなかに組み込んできた。その方々の思いは「いのち」に収斂しているようである。それについては、筆者の「いのちをいただき、いのちを生かす」(『日本ボランティア学会 2014 年度学会誌』, 6 - 11) で「自然とともにある『いのち』」として強調したが、筆者が参考にさせていただいている内山節さんも、「いのち」をつくりだしている場と関係に着目して、内山節, 2015, 『いのちの場所』岩波書店を執筆されている。一読をお勧めしたい。

じゃないと思います。

市原さんは、死を自然なこととして、「一人ひとりがいのちを最後まで生き切ること」²¹が、本人にとっても家族にとっても幸せなことだと考えて、サポート体制を整えられたのです。

市原さんの活動は、このほかにも多くの点で地域学に示唆を与えるものです。1つだけ紹介すれば、市原さんは、人生の最期を人らしく迎えることができなくなった人々の苦しみに出合って、やむにやまれぬ気持から動き出し、次々と現れる問題に一つひとつ対応しながら、知恵を絞り、情報を集め、人と人をつなぎ、ネットワークをつくって、人として生きられる状態をつくりだしてこられました。最初に学問的な専門分野があって、それをもって現実に臨んだわけではないのです。「いのち」という切実な問題に向き合って、何とかしたいという強い思いが、市原さんに、必要なことを学び、つなぎ、組み立て、実践させたのです²²。地域学が学ぶべき「実践の知」とは、以上のようなものではないでしょうか。

この講義の後半では、新妻さんと市原さんの経験や活動を紹介しました。なぜかといえば、そこから「何が重要なのか」を抽出し、学んで、地域学のなかに組み込んでいくためです。「地域学に輪郭を与える」とか「地域学を創る」とは、こういう作業の地道な繰り返しではないか、と考えています。

以上で、講義を終了します。

資料「わたしの地域学」質問と回答

【地域政策学科】

- ・地域学を創るという作業は、今後どこに向かうのか。

紹介した内容は発想レベルですので、まだ入り口にすぎません。仮に私が紹介したようなことを「地域学」の目標とすれば、それに近づくために必要な視点・情報・知を集め、組み立て、全体像をつくっていく必要が、「地域学」としては、あると思います。「地域学」が「切り身社会」しか見ていないようでは、どうにもなりません。個人としては、『いのち』という切実な問題に向き合って、何とかしたいという強い思いが、市原さんに、必要なことを学び、つなぎ、組み立て、実践させたのです」がヒントです。

- ・自然と向き合ってきた人々は「確かな何か」をもった、強くすごい存在であるとあったが、個人の意志を越えるような価値をどのように地域に活用できるのか。

わたしたちが「確かな何か」を学び、吸収して、自身の生活と生き方に活かすことが、まずは重要だと思います。地域にどう活かすのかは、直面している問題次第で、具体的な知恵と工夫が必要です。が、「確かな何か」は参照軸になるはずで。

- ・地域と行政との関わりについて言及がないが、先人たちの築き上げてきたシステムは無駄だということか。

今回の講義の趣旨から考えて、「地域と行政」の関係に言及する必要があるとは思わなかったとい

²¹ 「生き切ること」については、マリー・ド・エヌゼル、1997、『死にゆく人たちと共にいて』白水社を参照。

²² 2013年6月29日と30日に開催された日本ボランティア学会鳥取大会「ほぐす、編みなおすーボランティアな生き方が紡ぐ地域の新たな可能性」の第2セッション「課題を希望に変える技法ーボランティアな生き方が創造する地域のつながり」における市原美穂さんの講演。

うことです(以前、論じたことがあります)。それから、全部ひっくるめて「無駄か、無駄ではないか」というような論理の立て方はしない方がいいでしょう。問題があれば工夫して直せばいいのですから。しっかり議論するには、「先人たちの築き上げてきたシステム」とは何かを明示した上でないといけませんね。

- ・個人主義を否定し、かつて存在した「つながり」を再生することで、現在の経済や社会の体制に悪影響を与えることもあるのではないか。

「個人主義を否定し、かつて存在した『つながり』を再生すること」を主張したわけではありません。白か黒かということではありません。

- ・足元に目を向けるためにはどのような努力が必要か。

自分自身のこれまでを振り返ることから始められたらいいのではないのでしょうか。たとえば、今、なぜ食べることができているのか、生活できているのか、どのように生活しているのか、など、です。

「生きる」ことの根本から考えることです。

- ・地域のつながりをどのようにして取り戻すことができるのか。様々な立場があるなかで、どのように歩み寄り、いい関係をつくることができるのか。

いきなり「地域のつながり」を取り戻すというよりも、自分の生活のなかで「したい」とか「こうありたい」と思うことを丁寧に実行することがスタートではないのでしょうか。また、そういう生き方や試みを尊重することも重要です。そこから自ずとつながりが生まれるように思います²³。

- ・多層的な時間という概念が抽象的でわかりにくい。

講義で話した「時間」とは、変化というよりも、ものごとが続いていく長さ(持続)に着目したものです。過去に生きた人たちと何を共有しているのかを考えれば、イメージしやすいかもしれません。たとえば、今日では、おじいさんやおばあさんが自分の子どものこども(孫)を抱いたとき、喜びの感情があふれてくるそうですが、それもいつの時代でもそうだったわけではありません。十分食べることができて長生きするという前提があって初めて可能なことです。つまり、わたしたちが過去の人々と感覚的に共有できる「時間」は様々なものです。持続するものもあれば、失われるものもあります。長く持続しているもの(長期持続・構造:基層文化、心性)にはそれなりの意味があるはずで、無視はできません。「今」は様々な時間が積み重なって成立しているのであり、将来を構想するときもこの点を考慮すべきだと思います。

- ・地域を考える上で重要なのは人と命であるということだが、地域学部ではそういうことを学べる授業がほとんどないが。

直接、まとまった形で語られることはないかもしれませんが、このような思いを根底にもちながら講義をされている先生もいらっしゃるはずですから、それを感じとり、吸収する努力をされるといいと思います。

- ・柳原先生はどのように「命を託す」ということをしていますか。

自分の話を聴いてもらえる若い人たちがいることは、とても幸せなことです。教員にとって皆さんに話をすること自体が「命を託す」の一部です。人生で格闘しながらつかみとってきたものを若い人たちに伝えるということです。

²³ 柳原邦光, 2010, 「松場登美さんの仕事に学ぶ」, 『地域学論集』第7巻第1号, 115-132頁参照。

・市原さんと出会った経緯は？

日本ボランティア学会鳥取大会で、竹川俊夫先生の企画されたフォーラム「課題を希望に変える技法—ボランティアな生き方が想像する地域のつながり」で初めて講演を聴き、とても感動しました。

・物事を考えるとき、大枠から考えるべきか、小さな観点から考えるべきか。

どちらも大切でしょう。それでも自分にとって最も切実なところから考えるのが出発点だと思います。

・「死は特別なことではない」とあったが、大切な人が突然目の前から永遠になくなることは、特別なことではないでしょうか。

もちろんそうです。市原さんのおっしゃった「死は特別なことではない」とは、質問とは違う意味です。今度、市原さんのお話をよく聴いて考えてみてください。

・「とりもどす」とはどういうことだろうか。

この問い自体を大事にして、よくよく考えてみてください。

・「東電は憎いが、海に恨みはない」というその感情の違いは何だろうか。

海で生きる漁師さんになったつもりで、よくよく考えてみてください。

【地域教育学科】

・地域や範囲をどう定義づけるか。

レジュメをもう1度読んでください。

・具体的にどんなアクションを起こせば、地域に貢献し、学ぶことができたといえるのか。

地域に学ぶとか貢献するというのは、地域のために何かアクションを起こすこととイコールではないと思います。丁寧に暮らし、誠意をもって仕事をし、人を大事にする、尊重することが基本でしょうか。そういうことを無視してアクションを起こされたら、たまったものではありません。

・地域学は都市でも必要なのか。全国的に地域学はどれほど求められているのか。

今回紹介したような地域学であれば、都市か地方かという問題ではありません。「自然と人間の関係」という点では、都市にとってこそ必要なのではないのでしょうか。2つ目の質問については、インターネットで「地域学」で検索してみてください。様々な地域学が登場します。「鳥取学」のように地域名をつけたものもあります。地域を冠した学部学科が増えていますし、「地方創生」ともいわれていますが、「とにかく地域でなにかすればいい」にならないように、何らかの形でしっかりした「地域」理解が必要です。地域学部のような「地域学を創る」試みは少ないです。

・行き過ぎた個人化の対象は何か。

内山さんの言葉（近代的世界は「人間の本質は個人にある」とし、「すべてが個人に始まり個人に終わる、裸の個人の世界」である）を参考に考えてください。近代化が著しく進行した「先進国」や地域があてはまります。つまり、個人化の問題は近代化の問題だということです。インドネシアの場合は違うところがあるかもしれませんが。人と人との関係をものすごく大事にされますし、温かい感じがします。なぜそうなのかについて、仲野先生は、ムスリムである以上に自然との関係が大きいのではないかと話しておられました。

・地域学部から地域環境学科をなくしたのはなぜか。

地域環境の存在意義を否定したのではありません。環境という極めて大きな問題に取り組むにはもっと大きなまとまりで研究教育する必要があるとの判断で農学部への統合となったのです。

- ・地域学が更新されていくということは、地域学にゴールはないのだろうか。

あらゆる学問にゴールはありません。自然も社会も人間もそれほど複雑で変化していきます。

- ・無意識の願望とは？

レジュメの「共通の願望」(2頁下から3頁はじめ)を見てください。

- ・地域学への否定的な意見はあるのだろうか。

もちろんあります。「個人」を中心に考えて生きたい人にとって「地域」という発想自体に嫌悪感があるはずで。わたし自身のなかにもこのような感覚がないわけではありません。近代は個人であることを目指してきたのですから。「地域学」も「個人」を全面否定しているわけでは、もちろん、ありません。

【地域環境学科】

- ・「地域」の使用頻度を新聞の単語分析など客観的なデータで示してください。

研究としてはもっともな指摘です。地域文化学科の学生が朝日新聞のデータを使って分析したことがあります。その結果わかったのは、国が政策として打ち出すと一気に頻度が高まることです。この結果と日常生活での使用頻度との関係を統計的に分析するのは難しいようです。Webで利用できる新聞のデータが新しいものしかないことがあります。わたしの経験を紹介したのは、経験的に見当をつけることも重要だと思ったからです(もちろん、論文などで調べてもいます)。それに日常生活では統計分析して判断するわけではありませんから。

- ・「点滴社会」や「切り身社会」を改善することは可能か。

何とかしようと思うからこそ、いろいろな人が指摘されています。ご自身でも考えてみてください。

- ・なぜプリントをそのまましゃべるのですか。その場での思いや考えを語ってほしいです。

わたしは地域学について講義するときは、必ず念入りに原稿を書きます。これは学会発表のときと同じやり方です。わたしにとってそれほど地域学を語るのは大変ですし、何よりしっかりした内容を正確に伝えたいと思うからです。書き上げた原稿をもとにプリントをつくりますので、ご指摘のような要望が出てくるのですが、プリントなしにそのような内容を聴くと、正確に理解するのは難しくないですか。「その場での思いや考え」はそんなに重要でしょうか。聴衆の反応を考慮すべきですが、議論しているわけではありませんので。

- ・地域学の範囲がわからない。そもそも範囲があるのかも。

今回紹介したような地域学ですと、ここまでする範囲というよりも、問題に応じて検討すべき事柄が決まると考えた方が良いでしょう。

- ・地域のつながりについて考えられるプログラムやボランティアがあれば教えてほしい。

吉本哲郎さんの地元学が参考になるかもしれません²⁴。

- ・既存の学問体系を地域の視点から再構成するとはどういうことなのか。

理屈はともかく、実際どうしたらいいのか、わたしにもよくわかりません。

- ・地域で「いのち」などを見守る活動として、どのようなものがありますか。

第12回で竹川先生が登壇されますので、質問してください。

²⁴ 吉本哲郎, 2008, 『地元学をはじめよう』, 岩波書店参照。吉本さんの講演「地元学—足元をみつめてつながりを取り戻す—」(柳原邦光『『地域学総説』の挑戦6』『地域学論集』第8巻第3号, 2012年)参照。

- ・「一人ひとりが命を生き切る」とはどういうことだろうか。

市原美穂さんの第12回「地域における看取り文化の創造」を参考にしてください。

- ・最近、若者の地方への意識が高まっているというが、その意識の変化が地域にどのような変化を与えているか、気になった。

家中先生の第6回「生業・生活統合型多世代共創コミュニティモデルの開発」が参考になるはずですよ。

【地域文化学科（芸文コースを含む）】

- ・誰もが自分の大事なことを主張すると、社会が成り立たないのではないか。どこで折り合いをつけるか、具体的なものがあれば知りたい。

本当に大事なものを考えていくと、共通する問いや願いが出てくると思います。折り合いをつけることが必要なら、それを判断基準にできないでしょうか。

- ・地域と「いのち」との関係は？

人として「いのち」を生き切ることを願うとすれば、生活の場である地域がどうあるかは、切実な問題ではないでしょうか。

- ・学外の実践者をどのようにして選んでいるのですか。

わたし自身が地域学総説のプラン作りに深く関わっていたときは、学生の皆さんに「どうしても聴いていただきたい」が判断の基準でした。そのためには、その方の講演などを聴いたことがあるか、文章など書かれたものを読んでいるかが大前提でした。教員に確信がないとお招きすることはできませんので。

【特に重要な質問】

- ・住民みんなに関わる問題でなければ、地域学と言えないのか？

次の2つの文章の違いに着目してください。「地域に存在する様々な公共課題の解決を目指す、これが『地域学』です」（2004年地域学部創設時の文書）と、今回提示した「地域学の独自性は、わたしたち『一人ひとり』の『生の充実』や『わたしたちの幸福』の実現、『誰もが人として生きやすい状態』の実現を、地域という空間的な枠組みに着目して、地域性と歴史性を尊重しつつ、5つ視点から、考えることにあります。」「住民みんな」と「一人ひとり」「誰もが」「わたしたち」という表現の違いに、学部創設から今日に至る、わたしたちの「地域学」の深化を見ることができます。

「2017年6月2日受付、2017年6月22日受理」